不死者の宴に乾杯

/hidden

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不死者の宴に乾杯

【Ｎコード】
Ｎ０９１７Ｑ

【作者名】
／ｈｉｄｄｅｎ

【あらすじ】
転生、というか転移。
チート、というかややチート。
ハーレム？見る分には良いんだけど書くとなると…
という内容です。
三人称って難しいですね。

プロローグ（前書き）

文章は数書けば上手くなると
誰かに聞いたので三人称の練習です。
エヴァンジェリンはヒロインじゃないし
内容も厨二病乙です。

プロローグ

見た目以外は普通の大学生須藤栄華は目覚めて一瞬の間の後、
周囲の光景を見渡して咆哮した。

「これは一体どう言う状況だ！！」

まぁ、仕方のない事だろう、起きた瞬間彼の目に映ったのは
完璧なまでにモノクロに塗り分けられた大きな部屋だったのだから。
彼はベッドから降りると首をコキリと鳴らしてもう一度咆えた。

「おい！！誰か居るなら出てこい！」

その瞬間後ろから彼に向かって声が掛けられた。

「はい、ここに居ますが」

彼はすぐさまその声の方向に振り返ると相手を確認することも無く
その胸倉を掴み上げた。
彼の目に白いスーツを来た二十歳前後らしき青年が映る。
その光景は傍から見るとどう見てもチンピラに絡まれる一般人とい
った図だったが、
彼はそんな事も気にせず顔を近づけてその青年に向かって言った。

「ここは何処でお前は誰だ！５秒以内に答えやがれ！」

「あ、ぐ、ぐぁ。すいません、スイマセン、
話しますから離してください。苦しいです」

その言葉を聞くと彼は怒りの声を上げつつ掴んだ青年を思い切り地面に叩きつけた。

「上・手・い・事言ったつもりか！！」

激しい衝撃音が部屋の中に響き渡る。
彼は青年がベッドに手を掛けて立ち上がるのを待つともう一度問いかけた。

「さぁ、離したぞ。それで、お前は誰なんだ」

青年は激しくせき込むと恨めしげな顔で彼を睨みつつ呟いた。

「いきなりその対応は酷いと思いますよ」

「あぁ、そうだな。それで？」

生憎と彼に反省の様子は欠片も見られなかったが。
青年は小さく溜息を吐くと彼に向かってはっきりと響く声で言った。

「はぁ、じゃあ今の状況を説明させてもらいます。」

彼はようやく落ちついた様子で耳を傾けた。
「ここは夢の最奥地、夢の国と言う場所です。
あなたは現実世界で死んでこの世界に魂のみ連れて来られたのです」
彼の動きが一瞬止まる。そしてそれに数秒遅れて間抜けな声が響いた。

「は？俺が、死んだ？」

「はい、その通りです。私はこの世界の……まぁ、案内人のニャー介と申します」

多少イラッとした様子で彼が答えた。

「馬鹿にしてんのか？それともふざけてんのか？」

「いえ、馬鹿にしている訳でもふざけているわけでも有りません。私が貴方を殺してここまで連れてきました」

しばらくの間二人の間に沈黙が降りる。
その雰囲気に耐えられなくなったのかニャー介と名乗った青年が口を開きかけた瞬間、
彼が一瞬にして青年を押し倒し四の字固めを掛け始めた。

「い、痛っ。ギブ、ギブアップ。」

「ふ・ざ・け・ん・じゃ・ねえぞ！！」

鼓膜を突き破らん勢いで彼が咆える。
それに対して青年は泣きそうになりながら答えた。

「ゴ、ゴメンなさい！謝ります、だから暴力だけは止めてください」

「ゴメンで済んだら警察なんざいらねーんだよ！」

もはや完全に泣いているらしき青年は涙声で叫んだ。

「ごめんなさい！話を聞いてください。救済措置が有るんです！」

その瞬間ピタリと彼の動きが止まった。

「言ってみろ」

「はい、確かに私は貴方を殺したのですが。
それは私の意思では無く、私の上司的立ち位置の人間に命令されてやったのです」

それを聞くと彼は呆れた表情を浮かべて言った。

「どういうことだ？お前の上司が俺を殺してなんの得をするんだよ」

「さぁ、あの人の事なんて僕には分かりませんよ。
でも、その時に上司に死んだ貴方を別の世界に転移させるように言われたんです」

それを聞くと彼は四の字固めを解いて青年に向かって問いかけた。

「別の世界ってどういうことだ？」

「上司の話だと、魔法だのなんだのがある世界らしいですけど…」

普通の人間で有ればここで、魔法？と首をかしげる所であろうが、いきなりの死亡宣言に加え夢の国等と意味のわからない事を言われて混乱していた彼の回答は普通とは微妙に違った物になっていた。

「俺にもう一度死ねと？」

「いや、死なないぐらいに特典は付けると言ってました」

彼は不思議そうに首を傾げると言った。

「特典…ってどんなのだ？」

すると、青年はポケットから厳重に封がなされた封筒を取り出して彼に手渡した

「これが特典だそうです。向こうに付くまでは開かないらしいですけど」

「何でまたそんな面倒くさい事を」

「さぁ、何しろあの人の考える事は全ッ然分からないんで」

いまいち要領を得ない会話に嫌気が差したのか、彼はうんざりとした様子で溜息を吐いた。

「ったく、分かったよ。行きゃあ分かるんだな？」

その言葉を聞くと、青年は拾われた子犬の様なキラキラとした表情で言った。

「え？行ってくれるんですか？」

それを見て、彼は心底うっとおしげな表情を浮かべると吐き捨てるように言った。

「元の世界に戻れるならそれに越したことはないけど、どーせ戻れないっていうんだろ」

「まぁそうなんですけど、良いんですか？」

要望が認められたのがよほど嬉しかったのか
先程とは打って変って少し楽しげな調子で青年が話しかける。
その瞬間彼の顔がまるで作り物のようにピシリと引き攣った。

「死ぬよかマシだっつう話だ。誰も快諾なんて言ってねえよ」

一線を超えれば殺しかねない様な剣呑な雰囲気を醸し出しつつ彼が
答える、
青年はその背後に背負う般若の形相に恐れをなしたのか
突然全力で謝り始めた

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい
お願いですからから殺さないでください」

「良いからさっさとしろや」

青年は背筋をシャキリと伸ばしてハイと答えるとテキパキと
彼の周りに魔法陣の様な物を書き始めた。
それは大体１０秒くらいで書きあがり、
彼の周りには怪しげな文章の書かれた紙が浮かびあがり始めた。

彼は周りの呪文の様な物をぐるりと見まわすと
感心した様子で呟いた。

「へぇ、これが別の世界に飛ばす魔法なのか」

すると、青年はやや自慢げに言った。

「いえ、これは護符みたいな物ですよ。
今回は時間と空間の移動になりますから、
妙なのに捕まるととんでもない事になりますからね」

「妙なの？」

「えぇ、具体的には猟犬とかですかね」

「猟犬、ねぇ」

彼は多少の疑問を覚えないでも無かったが、
魔法とやらの知識が有るわけでもない、
そう言うものなんだろうと考えて自分を納得させて、
青年の呪文の完成を待った。

しばらくの間青年は細かな調整を行っていたが、
やがて満足気な表情で彼の方を見て言った。

「はい、出来上がりました。後は向こうの世界に飛ばすだけです」

「それで、どうやってやるんだ？もしかしてまた新しく魔法を書き足すのか？」

「いえ、こうするんです」

そう言うと、青年は何処からともなくとりだした
黒い宝石の入った小箱を音を立てて閉じた。
その瞬間、青年が護符と呼んだ呪文の外側から
黒い結晶が彼を囲むように現れ、
瞬く間に彼を包み込んだ。

しばらく、その中からは彼の驚きの声と、
半ば八つ当たりじみた怒りの声が響いて居たが、
その結晶が消えた時、そこに彼の姿は残っていなかった。
それを見届けると、青年は小さく溜息を吐いて
誰もいない背後の空間に声を掛けた。

「これで良いんですか？」

刹那、まるで元からそうで有ったかのように、
その空間は粉雪の舞い散る雪原へと姿を変え。
そこにはその舞い散る雪に
溶け込むかのような白い肌と、
まるでサファイアを散らしたかのような
透き通った青色の髪を持った
女性の様な姿をした何かが立っていた。

「えぇ、お疲れ様」

まるで鈴を響かせたが如き可憐な声が
空間中に響き渡る、
青年はその声に聞き惚れるでも無く、
もう一度大きく溜息を吐くと、愚痴るように言った。

「全く、貴女も人使い、いや、人外使いが荒すぎますよ。
こんなに謝ったの我が君のご機嫌を損ねた時以来ですよ。
あんな相手この姿じゃ無かったら殺してますよ？」

それを聞くと彼女は口元に手を当てて僅かに微笑みを浮かべて言った。

「あら、それは随分と久しぶりなのね。
まぁ、良い経験になったんじゃないの？」

その話を聞いているんだか聞いていないんだか分からない回答を聞くと、
青年は苦虫を二・三匹噛みつぶしたかのような
なんとも言えない微妙な苦笑いを浮かべて呻くように呟いた。

「あぁもう帰りたい。いや、この人から逃れられるなら還っても良い」

その言葉を聞いていたのか、
彼女は微笑みを浮かべたまま
彼の傍に近づくと、やや楽しげに宣告した。

「それは無理よ。だって貴方使いやすいんだもの」

「うぅ、理不尽極まりない」

またしても青年の目から涙がこぼれ出す、
彼女はその涙を何処からかとりだしたハンカチで拭うと、
艶かしくも何処か不気味な笑顔を浮かべて言った。

「さ、後二つのお仕事も頑張ってね。強壮なる使者さん」

その空間に降り積もる雪は強さを増すばかりだった。

プロローグ（後書き）

これ書くだけで大体四日かかってます
相当不定期更新になると思います。

第1話：人の形のヒトデナシ（前書き）

読み返したら微妙だったので
ほぼ書きなおした、
土日書けなかったのが辛い

第1話：人の形のヒトデナシ

最初に須藤栄華の目に映ったのは金色の髪をした少女の姿だった。

「ん、やっと起きたか。気分はどうだ？」

もちろん、目覚めたばかりの彼にとってこの状況は理解できるものでは無く。

彼は周囲をゆっくりと見回すと、少女に向かってやや遠慮がちに問いかけた。

「あ、はい、大丈夫です。ありがとうございます。
それで、あの、ここは何処で、貴女はどなたでしょうか？」

「私か、私はこの麻帆良学園の学生だ。ついでに、ここは私の家だ」

彼は少し考え込んで状況を把握すると少女に向かって

「えっと、幾つか質問させてもらっても良いですか？」

と尋ねた。

「ん、構わないが。こちらも幾つか聞かせて貰っても良いか？」

彼は不思議そうに首を傾げると、彼女に問い返した。

「はい、いいですよ」

「お前、何者だ？」

訝しげな表情で彼女が見つめる

彼はその意味を分かりかねて思わず問い返した。
「え？は？それは一体どういう意味ですか？」
狼狽する彼に対し、
彼女は冷静な態度を欠片も崩さずに言った。
「そのままの意味だ。お前は何者だと言っているんだ？」
「俺は、えっと、須藤栄華と……」
「そんな事は聞いていない。心臓も動かない呼吸もしない血も巡っていない
　屍人鬼かと思えば魔力も通っていない。お前は何という種族かと聞いているのだ」
「はい？」
彼の時間がゆっくりと音を立てて止まった。
彼は思わず胸に手を当てる。
有る筈の拍動はそこには無く、心臓の鳴る音も欠片とて聞こえはしなかった。
「これは、一体。え、何で？どういうことだ？」
彼の動揺を察したのか、彼女は怪訝な表情を浮かべると
彼に向かって尋ねた。
「まさかとは思うが、自覚無しだったのか？」

しかし、彼はその言葉に答えるでもなく、
蒼白な表情でうわ言のように何言かを呟き続けていた。
流石に彼女も心配になったのか、
彼の側に近寄ると、彼の肩に手を当てて言った。

「おい、どうしたんだ？」

「触るな！」

彼はその手を思い切り払いのけると、
その場にへたり込み、虚空に向かって咆哮した。

「あの野郎ォか！アイツがやりやがったのか！！
ふざけんじゃねェぞ、何が特典だ！
既に死んでりゃあ死なねえのは当り前だろうが！！」

部屋中を覆い尽くす様な絶叫、
その姿に彼女は何を見たのか、
一瞬憂い気な表情を浮かべると狂ったように絶叫し続ける彼に
優しく手を当てて、耳元で静かに呟いた。

「少し休むと良い。多少は気分が収まるかもしれない」

そして、彼女の口が小さく言葉を紡いだ。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　彼の者に一時の眠りを」

その瞬間、あれほど怒り狂っていた彼が
突然操り人形の糸が切れたかのようにその場に倒れ込み、眠り始め

た。
彼女は、彼を近くのベッドに寝かせると、
自分もその近くの椅子に座って、静かに目を閉じて言った。
「しかし、妙な奴だと思えばまさか私に似たような奴だとはな。
久々に夢に見そうで嫌な気分だ」

しばらくの時間が経った、
栄華はこの短い期間で三度目になるであろう目覚めを迎えていた。
すぐ隣に座っていたのは金色の髪の少女。
「さっきの、人か……」
彼が誰に言うとも無く呟くと、彼女は目を閉じたままに答えた。
「あぁ、先程は突然あんな事を言ってすまなかった。
気分は落ちついたか？」
彼はほんの少し言葉につまると、
喉の奥につまった言葉をほぐすようにゆっくりと言った。
「はい、おかげさまで」
それを聞くと、彼女はフッと口の端を持ち上げて
「それは良かった」
と一言だけ言うと口を閉ざし、そのまま黙り込んでしまった。

自然と、部屋の中を静寂が支配する。
栄華は、少しの間その視線を天井の辺りに漂わせて居たが、
突然思い立ったかのように体を起こして彼女に尋ねた。

「ちょっと、良いですか？」

その言葉に彼女はようやく眼を開けると、
彼の方を優しげな表情で見つめて言った。

「どうした？」

「いえ、さっき聞こうと思っていた事を聞き忘れてしまったので」

彼女はそう言えば、と言わんばかりの表情でポンと手を叩いた。

「あぁ、そう言えばそうだったな。何が聞きたいんだ？
それと、喋り方は普通で良いぞ」

彼は軽く咳払いをすると、真面目な表情で話始めた

「ん、すまない。それじゃあ聞かせてくれ。
俺の体の事と良い、あの魔法と言い、君は一体何者なんだ？」

彼女は彼に一瞬だけ鋭い視線を向けた。

「……魔法を知っているのか」

栄華はその視線を受け止めると
少しだけ嫌そうな表情を浮かべて言った。

「あぁ、俺をこの体にした奴に……ちょっとな」
彼女はその言葉に大体の事情を察したのか
視線を外すと背もたれに倒れかかって言った。

「なるほど、魔法使いでは無い訳か。
なら私の事は知らなくても仕方が無い。
私は吸血鬼の真祖にして最強の魔法使い。闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）だ」
彼は不思議そうに彼女に尋ねた。

「吸血鬼、は分かるけど真祖ってのはなんなんだ？」

「あぁそうか、普通に暮している分には知らなくても
当然な知識だしな。
感染以外で生まれた吸血鬼の事を指す言葉だ
基本的に弱点は無いうえ不老不死だ」

「ほぼ無敵か、凄いな」

彼が感心の声を上げると、
彼女は嫌悪の表情を顔に浮かべて言った。

「これが望んで得たものならいいが、
そうでなければ害悪以外の何者でも無い。
それはお前も分かるんじゃないのか？」

その言葉に彼はハッとしたような表情を浮かべると
顔を軽く伏せて申し訳なさそうに言った。

「あぁ、すまない。考えが足りなかった」

「気にするな。
それに、そう言う意味ではお前も被害者だろう。
一体何が有ったんだ？」

当然と言えば当然の疑問であるが、
彼にとってはその疑問はある意味逆鱗だったのか
一瞬額に青筋を走らせた。
それを見て彼女は気まずそうな表情をすると、
片手を振って言った。

「あ、あぁー、と。この話はこれ以上触れない事にするか」

彼は何とか怒りを抑えこんだらしく
無理矢理に作った冷静な表情を顔に張り付けて言った。

「……そうしてくれると助かる」

互いに触れてはいけない部分に触れてしまった事で
二人の間に凄まじく気まずい空気が流れる。
その空気を何とかしようと思ったのか
彼は無理矢理に笑顔を作った。

「所で、君はここに住んで長いのか？」

「まぁ、それなりにな」

「だったら、この辺の事を教えてくれないか？
来たばかりで土地勘が全く無いんだ」

彼女はやや半目になって不思議そうに尋ねた。

「帰らないのか？」

「帰れたら良いんだが、もう帰り道が無くてな」

「そうか……ふむ」

彼女は腕を組んでしばらく考え込むと
不意に片手を彼の方に伸ばした。

「ん？どうしたんだ？」

「ここの管理者に話を通してやる。
たしか用務員の枠が空いていた筈だったしな」

彼はそれを聞くと訝しげに彼女に尋ねた

「そんな事が出来るのか？」

「あぁ、ここの校長とは知り合いだからな。
それくらいの無理なら通るだろう」

栄華は彼女の手を取ると少々情け無さげに言った。

「そうか、何だかすまない。
えぇーっと……」

それを聞いて彼女は口の端を釣りあげて笑うと

「エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルだ」
とだけ言って扉を開けて外に出た。

話しこんでいて気付かなかったけれど、
外は太陽の光が差し込んですっかり晴れ上がっていた。
栄華はその明るさに目を瞬かせつつも
彼女の後ろを歩き始めた。

第1話：人の形のヒトデナシ（後書き）

できるだけ週一以上の更新を心がけたいと思っております。

第二話：栄華なる新生活（前書き）

ぎりぎり一週間以内に更新できた……か？

第二話：栄華なる新生活

いつに無く平和な午後の一時。
今日は仕事が早く終わった事もあり、
麻帆良学園の学園長である近衛近右衛門は
お茶を飲みつつ優雅に過していた。

しかし、安寧の時とは得てして長くは続かない物で、
その平穏は突然音を立てて扉から入ってきた
金の髪の少女によって儚くも崩れ去った。

「邪魔するぞ」

彼は突然現れた厄介事に内心やれやれと思いつつも、
平然とした表情を張り付けて尋ねた。

「何の用かの？」

彼女は欠片も遠慮する様子を見せずに
端に備え付けられたソファに座りながら答えた。

「あぁ、就職希望者を連れて来た」

その言葉に彼は手に持っていたお茶を置くと、
彼女の方を見据えて言った。

「ほう、お主が自ら連れてくるとはな……魔法の関係者かの？」

彼女は何時に無く優しげな、それでいて憂う様な表情を浮かべた。

「いや、まぁ、そうと言えばそうだが……
違うと言えば違うかも知れないな。
少なくとも、保護しておいた方が良い者なのは確かだ」

彼は初めて見る彼女の表情に若干ならずと
戸惑いを覚えぬでも無かったが、
相変わらず顔に張り付けた表情を崩す事なく言った。

「ふむ、何か思うところがあるのかの？」

「まぁ、な」

はっきりとしないその言葉に、
彼はこのまま質問を続けても
曖昧に口を濁されるだけだろうと感じて
とりあえずその就職希望者とやらに会って
真意を見極めようと思い、彼女に向かって告げた。

「とりあえずその人に会わせてくれんかの？」

彼女は軽く頷くと、外に向かって声を張り上げた。
扉が開いて一人の青年が入ってくる。

二十三・四歳程だろうか。
鋭く釣り上がった眉、キッと一文字に結ばれた口、
ピシッとした黒のスーツ
一見するとどう見てもマフィアか
何かの組員にしか見えない風貌だった。

近右衛門は思わず一瞬身を固くすると、
気を取りなおして青年に挨拶した。

「君がエヴァンジェリン君の紹介してくれた者か、
儂はこの学園の学園長の近衛近右衛門じゃ」

青年はその場でピシリと姿勢を正すと、
やや堅い声でそれにそれに答えた。

「中央都市大学教育学部数学科修士二年、
須藤栄華と申します。
用務員の仕事の面接を受けに参りました。
よろしくお願い致します」

学院生だと言うのを聞いて
近右衛門は心の中でほんの少し安堵の溜息を吐いた。

「ほう、教員志望だったのかの？」

「はい、既に教員免許も取得していました。
こちらで利用できるかどうかは分かりませんが」

「どういう事かの？」

その問いを受けて青年は言葉に詰まった。

「え、あ、えーと……」

すると、近右衛門が彼の不自然な動作を問いただす前に、
ソファに座ったまま話の流れを見守っていた

彼をここに連れて来た張本人である
金の髪の少女、エヴァンジェリンが助け舟を出した。
「須藤、じじいは魔法の関係者だ。
詳しい事を話しても問題無いぞ」
それを聞くと青年は、一旦口を閉ざし。静かに頷いて
近右衛門に向かって話し始めた。
「では、簡単にお話させていただきます。
私は本来別の世界の人間だったのですが。
ニャー介と名乗る妙な存在によって
一旦殺され、その上でこちらの世界に
復活という形で転移させられたらしいのです」
ニャー介と言う名前が出た瞬間、
近右衛門は微かに動揺したが、
彼はその動揺を押し殺して静かに青年に尋ねた。
「証拠になるような物は有るかの？」
青年は僅かな逡巡の後に、
近右衛門に向けて片手を差し出した。
「実際に触れてもらえば分かると思いますが、
私の体には血液が流れておらず、心臓も拍動しておりません。
また、これはこの世界の魔法とも異なる技術で行われたらしく。
魔力も流れておりません」
近右衛門は実際に彼の手に触れると、

小さく溜息を吐いて言った。

「確かにそのようじゃのう。
エヴァンジェリン君はそれを知っておったのか？」

「はい、ここに来る途中で大体の事情はお話させていただきました」

それを聞くと、近右衛門はしばしの間考え込み、
やがて顔を上げると真剣な表情で言った。

「良いじゃろう、採用じゃ」

青年はあまりにも呆気なく採用を通告された事に
驚いたのか、しばしの間硬直したが、
すぐに頭を深々と下げてお礼を言った。

「ありがとうございます」

近右衛門は僅かに微笑を浮かべると、

「とりあえずは、用務員室と職員寮を
案内させるから少し待ってもらえるかの？」

と言って手元の電話を取り、
おそらく最も手の空いているであろう魔法の関係者に電話を掛けた。

その間、青年は手持無沙汰な様子で周囲を見渡していたが、
近右衛門の電話が終わると同時に視線をまっすぐに戻して
彼の言葉を待った。

「待たせてしまったの。もう少しすれば迎えが来るはずじゃ。
儂は少々エヴァンジェリン君と話たい事があるので
少しの間外で待っていてくれるかの？」

「はい」

青年は退出の前にもう一度深く礼をすると、
きびきびとした足取りで部屋を出て行った。
それを見届けるとすぐ、近右衛門はエヴァンジェリンの方を振りかえった。

「それで、彼の事は本当なのかの？」

青年を見送る彼女は
彼女はどこか遠くを見る様な目をしていた。

「あぁ、残念ながらな。
ここに来る途中確認してみたが、
あいつの体自体は完全に死んだ状態で、
体の中に入りこんだ何か良く分からない物によって
動かされている状態だった。
例えて言うなら、生ける屍（リビングデッド）と言った所か」

それを聞くと近右衛門は
細めた目を鋭く光らせて言った。

「そうか……」

その尋常ならざる様子にエヴァンジェリンは
訝しげに尋ねた。

「どうしたじじい？」

すぐにその表情は普段通りの何を考えているのか分からない表情に戻った、が、
それはやはり何処か不自然なように見えた。

「いや、何でも無いんじゃよ」

エヴァンジェリンもそれには気付いてはいたが、あえて、それ以上の事は聞かず。

「そうか」

とだけ言ってそれきり黙りこくった。
其の後、部屋の中には重い空気を伴った沈黙だけが流れ続けていた。

第二話：栄華なる新生活（後書き）

二話の修正にかなり時間を喰われた、
本編に入ったら展開は原作通りにする予定だけれど、
キャラ個々の設定は多少変えるかもです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0917q/

不死者の宴に乾杯

2011年1月20日00時47分発行